

# 越前出日家墓参記

## 一 はじめに

世襲面打家である出目家が越前にいた時代の三代を越前出目家と言う。越前出目の家系について喜多古能は、二郎左衛門満照、二郎左衛門則満、源助秀満の三代としている。秀満は「府中村安祥寺に住す」とする。また、『假面譜と奈良人形』には「源次郎満吉 後出家ス常心坊ト号ス 越前府中妙法寺村西本願寺流安祥寺ヲ開基ス」と源次郎満吉（源助秀満）が寺の開基であると伝える。この「安祥寺」は現在の「安證寺」であり、福井県越前市妙法寺町一四―四一に現存する浄土真宗本願寺派の寺院である。

この寺が、寺伝として面打ちと関係のある寺としていたことについては、「安證寺屋敷・持山・山田畑留書」に、

当寺屋敷持山田畑留

安證寺務（黒印）

常山（黒印）

常応（黒印）

当寺屋敷之事

## 飯塚恵理人

一 安證寺屋敷之儀者、往古波多野出雲守様より御寄附被成、由緒書別ニ有之候、其後太閤様御檢地之時分、住寺面うち申候ゆへ、其節面うち屋敷先之通り相除候と、御書付被下、只今ニ所持仕候、

太閤様御檢地御書付のうつし

為御意申入候、夜前被仰付候、ミやうほうし村面うち居屋敷之儀、前より御用捨之由候間、別ニ書付置候へと御意候、為其如此候、

六月十六日 伴 藤三郎（花押）

面 宋六（花押）

山本仁左衛門殿

とある。寺の記録類で後述の『当山沿革』（安證寺所蔵）が、常応を第六世としその没年を寛政九（一七九七）年八月六日とする。常山は、この常応の前に記されて寺を代表する人物であることから、五世の「常仙」である可能性が強い。呼称が「じょうせん」であるとすれば、「常仙」と「常山」は音が通じる。第五世の「常仙」であると考え、この「安證寺屋敷・持山・山田畑留書」は、常仙の死去、すなわち宝暦十二（一七六二）年五月二日以前に書かれたこととなる。

この「安證寺屋敷・持山・山田畑留書」によれば、「太閤様御検地」の行われた前後に寺に住んでいた人が面打ちをしており、「面打ち屋敷」と呼ばれたこと、「面打ち屋敷」であるがゆえに除地となっていたことが分かる。武生の太閤検地については、『武生市史資料編 検地帳 村明細帳面<sup>(註4)</sup>』が参考となる。これには武生市（現在の越前市）の七箇所の検地帳が載っているが、「慶長三年、長東正家を総奉行として実施された越前国検地は、秀吉の没年に当たり、彼の名によつて行われた最後の検地であるというだけでなく、従前の検地に比べても著しい差があることを指摘せざるを得ない。このことは従来から問題とされてきた点であるが、越前の石盛（斗代）の高さは、『地方凡例録』にも『他国に勝れ石盛の高きハ越前・甲斐・大和・出羽・奥州』とあり、『箇様の処ハ尤希なることなり』ともあるように、この石盛の水準は当時の越前の生産力のそれに照応しているとは云い難く、再度の朝鮮出兵の最中に実施された検地であることを考え合わせるとき、きわめて政治的な影響が強いものであったとも考えられる。」とあり、慶長三（一五九八）年に行われ、しかも実質的にかんがりの増税になっていると考えるとよいだろう。安證寺は慶長三年には「面打ち屋敷」であり、それゆえに除地として税金が無税となっていた可能性が高いだろう。

越前出目家所縁の寺ということで、保田紹雲先生が平成二一年八月七日に墓参されるのに併せて、筆者もこの安證寺に連れて行っていただいた。そして、能楽研究史上有益と思われる資料を閲覧させていただいたので、その報告をさせていただきたい。

安證寺の現在の住職は島氏であるが、明治まで出目姓の僧侶が住職を勤めていた。大正から昭和初期にかけて、一時無住の時期があり、このため散逸した資料もあったのではと思われるが、とりあえず越前出目家と、浄土真宗・安證寺との関わりについて資料を紹介し、大方のご教示をお願いしたい。

## 二 越前出目家と下間仲孝

越前出目家と浄土真宗との関係を示すものとしては、本願寺の坊官の下間少進法印仲孝（一五五一—一六一六）宛の「出目源介起請文<sup>(註5)</sup>」が挙げられる。これを引用すると、

一、我等事、御取立を以面御うたせ被成、其上大事之御手くらうなどの仕様相伝被成候事、生々世々忝奉存候。就夫、已来我等身上もち上、何方より人々の御取持被成御馳走候共、少も法印様之御意をそむき、何方之人々へ御奉公だて申間敷候事。

一、法印様ヨリ御細工被仰付候ハ、夜日肝煎面打たて上ゲ可申候事。

一、法印様御自分之御細工など被仰付候時ハ随分無緩我等心の及情を入、又手間料など少茂取不申御奉公可申上候事。

右之条々於相違申者、日本国中之大小之神祇・

御天道、並御開山上人様之蒙御罰今生にてハ

白らいこくらの病を請、来世にてハならくむけんにしづみ、うかむ事有間敷者也。 仍如件。

慶長七年三月七日

出目源介 満□（花押）

下間少進法印様参

となる。この文書では、慶長七（一六〇二）年当時の出目源介が、

① 下間法印からの「取立」によって面を打っていた。

② 下間法印から「大事の御手」「くらうなどの仕様」の相伝を受けていた。

③ 下間法印の意に背く「奉公」はしない。

④ 下間法印から細工の注文を受けた場合は必ず念入りに作って納める。

⑤ 下間法印から「御自分の細工」の注文を受けた場合は、入念に作成し、手間料は取らない。

ことを述べている。この書状は、当時の出目源介と本願寺、特に下間家との密接な関係を示す点で非常に重要な資料といえるだろう。慶長七年前後の下間少進の動向について、片桐登氏<sup>（注6）</sup>は、「関ヶ原役は徳川家康を主将とする東軍の勝利に帰し、近世の訪れとなったが、少進と本願寺とは苦い思いをしなければならなかった。すなわち、東西の手切れに際し、本願寺の態度に疑義があつたとされ、門主准如や少進の子の仲世（式部卿）等が西軍石田三成に一味し、鉄砲の弾丸を寄進援助した、など具体的に十数項目を挙げて難詰されたのである。（中略）幸にも疑念は晴れ、何の科にも問われなかったが、少進は謹慎を余儀なくされたらしく、合戦後から七年三月頃まで、殆ど動きを見せなかった。」とある。この起請文は、少進の謹慎期間のちようど終わりころに提出されたものであると言える。起請文の「くらうなどの仕様」の具体的な内容は明らかに出来ないが、喜多古能<sup>（注7）</sup>は、少進について「下津間少進法印仲孝 源助同代にして西本願寺坊願なり、乱舞の達人なりしが又面を打つ、古源助兩人古び写しの工夫せし人、喜多の満媚面は此兩人の工夫なり」と仲孝と源助との二人の共同作業の中で「古び写し」が出来たと記す。「くらうなどの仕様」が「古び」のつけ方だったのかは分からない。今後、能面制作の上で、どの時代・どの作者から「古び」が見られるかなどの検討が必要であろう。源介は「身上もち」のため他からの注文を受けることもあつたろうが、下間法印と疎遠などところには「奉公」しないことを誓っているのだから、本願寺・下間家の専属とまではいかなくとも、配下の能面工房と考えてよいように思う。②の法印

からの相伝の内容や、④の法印からの注文と⑤の「御自分の細工」が分けて書いてあることなども、能面研究上興味のある事柄であるが、ここでは立ち入らない。

この起請文が出された慶長の時期は、徳川幕府によるあらたな検地が企画された時期であつた。『武生市史資料編 検地帳 村明細帳面<sup>（注8）</sup>』には「慶長六（一六〇一）年越前に入封した結城（松平）秀康も『慶長十一（一六〇六）年、領内を通じて較々大規模の検地を行ひしが、石高には甚だしき差異は生ぜざりき』（旧版福井県史、藩政時代編）とあるが、この時の検地を示す記録は今のところ市内には見られない」とある。慶長七年は新領主入封の翌年であり、検地の行われる可能性も十分あつた。安證寺は太閤検地の際に「面打ち屋敷」として除地の権利を獲得していたとすれば、慶長七年の時点で下間法印の能面工房であることを下間法印に誓い、またそれを認めてもらうことが、徳川幕府の検地の上でも意味のある行為であつたと考えられる。

### 三 寺伝と代々の住職

寺の代々の住職については『明治三十年中秋第拾世常念起稿 大正二年夏 清写 当山沿革 福井県南條郡神山村妙法寺第拾四号四拾壺番地 安證寺』（安證寺所蔵…以下『当山沿革』）とある書類に載る。明治期までの住職を挙げると、

#### 世代住職

第一世 常見	住職年月日不詳	永正十（一五一三）年 正月十三日死亡
第二世 常円 同前		元和四（一六一八）年 三月八日死亡

第三世 常後 同前

寛文十（一六七〇）年

第四世 常甚 同前

正月二十五日死亡  
寛永五（一六二八）年

第五世 常仙 同前

五月十六日死亡  
宝曆十二（一七六二）年

第六世 常応 同前

五月二日死亡  
寛政九（一七九七）年

第七世 常倫 同前

八月六日死亡  
文化八（一八一二）年

第八世 常観 住職

七月十三日死亡  
弘化四（一八四七）年

文政三（一八二〇）年  
三月廿一日

第九世 常称

住職年月日不詳

明治三（一八七〇）年

第十世 常念

五月十日死亡  
大正九（一九二〇）年

明治三（一八七〇）年  
三月二十日  
十二月十一日死亡

第十一世 常宣

となる。この『当山沿革』は、明治になって第十世の常念がまとめ  
たものだが、第九世の住職開始年代も伝わっていない。七世まで命  
日は載るものの、住職になった年月日は不明である。住職の死去後  
無住の期間があつて、その間に資料が散逸するといったこともあつ  
たのではなからうか。次項で紹介する幕末の出目満光の安證寺宛書  
簡は、そのようなことにも関係する貴重な書簡である。

#### 四 出目元休満光と安證寺宛書簡

安證寺所蔵の書簡の中に、出目元休満光よりの書簡がある。『武  
生市史』には収められておらず、年代は不明である。差出月日は「七  
月十八日」とあるが、差出年が不明である。文中に「常観様」とあ  
り、常観が住職であることを知っていることから、文政三（一八二  
〇）年三月二一日以降、満光没の安政元（一八五四）年七月二二日  
以前の手紙と判断される。文中に「當年四十才二相成り」とあるが、  
満光の生没年が不明のため手紙が書かれた年を導き出すことは出来  
ない。以下に翻刻を示す。

書簡（写真一・二・三）

一 翰呈上仕候 先以秋暑之節

御坐候処 愈御安壯被成御坐珍重

御義奉<sub>レ</sub>存候 然者打絶 御文通御尋

不<sub>レ</sub>仕万々御無音ニ罷成候 先年

已来御出府之節者 寛々御會談

仕 大慶奉<sub>レ</sub>存候 其后一寸御尋ニ可申

筈之處 遠路幸便無<sub>レ</sub>之 此度

宜便ニ付 旧今御尋申上候 右得<sub>二</sub>貴意<sub>一</sub>

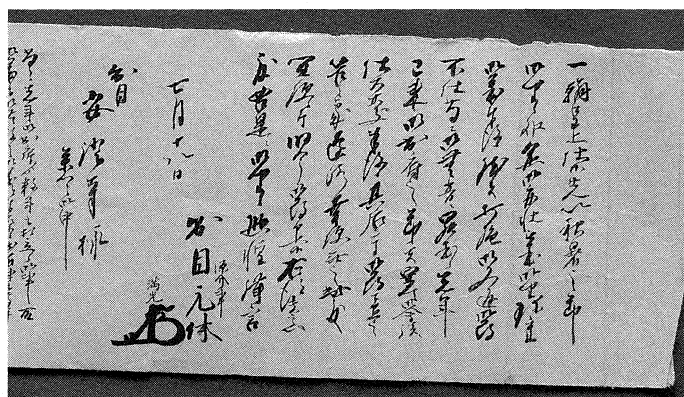
度如是ニ御坐候 恐惶謹言

源介事

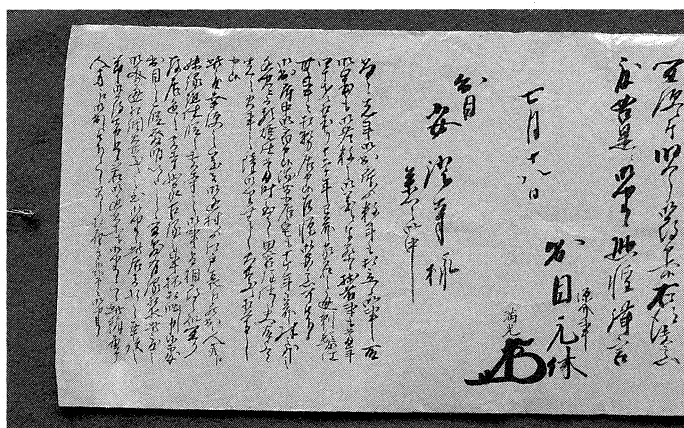
出目 元休

七月十八日

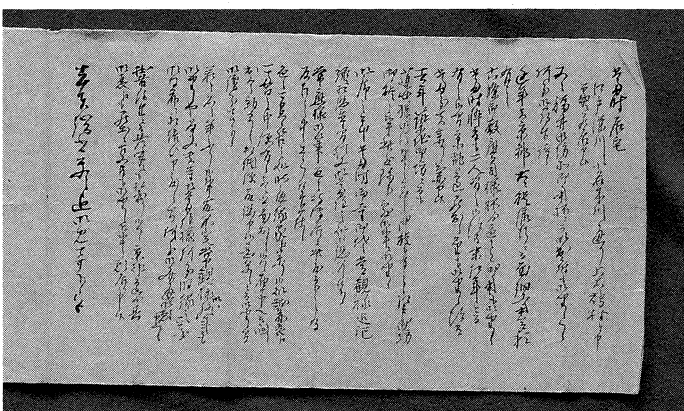
満光（花押）



写真一



写真二



写真三

出目

安證寺様

参人々御中

尚々先年御出府ヨリ数年も相立候御事故  
御歳も御老数之御義と奉察候拙者事も當年  
四十才二相成り 十二ヶ年已前家名之通剃髪仕  
無事二相務居申候 乍レ憚御安意可被下候  
御出府中御宿申候浅草居宅も十ヶ年已前殊之外之

近火二而 類焼仕 當時至て田舎住仕候 夫故か  
先々火事之障 御坐無之大慶二相暮し

申候

此度幸便之義者 御近村ヨリ江戸表江罷出候人方江  
妹縁組仕段々貴寺之御事共相尋候処宜ク  
存居色々貴寺拙家古縁之事抔相咄し申候處  
出目之段発明いたし候 宜敷有縁相求此度之  
御文通相調大慶二之至御坐候 此后者折々幸便之  
節御尋可申上候 若御返書等も御坐候ハバ 此翰届ケ

人方江戸出し被下候ハバ 早々相届き候事ニ御坐候  
當時居宅

江戸深川小名木川通り上大嶋村と申

處ニ罷居申候

又々福井御坊所御用杯ニ而御出府も御坐候ハバ

何分御尋奉<sub>レ</sub>待候

近年者京都大ニ能流行ニ而面細工用多頼  
有之

六条御殿鷹司様杯<sub>ハ</sub>色々御用も御坐候

當時悴共も二人有之候得共 未幼年ニ而

有之候間 京都邊罷出候望も御坐候得共

當分者参り兼申候

去年築地御坊ニ而も

蓮如様御法事之節 御能も有之江戸御坊

御能之事 此度珍ら敷御事ニ御坐候

御序之節當時御寺御代々常観様迄記

録ニ相認置候間 何亦御當住之処御認可被下候

常應様御筆色々持傳居候此度印之為

反古之中一つ呈上仕候

色々可申上候筈之処 昨夜縁家迄参り御処越前表え

一両日之中便有之候が書面出し候ハバ届ケ申べき咄し

出今朝早々相調便故認申候甚早々ニ而御坐候間

御読分可被下候

若々久々年ふり御事故不定常観様御終年ニも

御坐候や 尚又貴寺御当住様何分旧縁之處

御同前ニ相結び申度候間 何分御文通御願申上候

拙者浮世ニ而老年にも相成り候へば 京都邊より其

御表江も罷出候事共御坐候御事願居り申候

先者端書早々迄御免可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候 以上

出目

安證寺様

この手紙は「七月十八日 満光（花押） 出目 安證寺様 参人々  
御中」までの前半と、後半に分かれている。前半には、しばらく音  
信をしなかったことを詫び、「先年」江戸に出てこられた時には会談  
することが出来たことを感謝している。また、会談のときに依頼さ  
れたことについて、なかなか機会がなくて手紙が出せなかったが、  
今回よい機会を得たので送ることが出来たと述べている。日付は  
「七月十八日」だが、年はわからない。出目元休は源介事と書いて  
あるので通称は源介であり、名前は満光である。この書簡の宛名は  
住職の名ではなく、「安證寺様 参人々」となっているが、後述のよ  
うに十数年音信をとっていないと考えられることと、知人の住職の  
常観が高齢のため、死去もしくは交代していることを考えたためで  
あろう。

後半の部分の内容を箇条書きにすると以下のようになる。

- ・ 先年の出府から数年（以下に十二年前の剃髪を報告として書いて  
いることから、十二年以上か）経っているので、手紙の相手  
も「老年」になっているだろうこと。
- ・ 満光も当年四十歳になったこと。
- ・ 十二年前（二十八歳）に家名の通り剃髪し勤めていること。
- ・ 先年の江戸へ出府の際に泊めて差し上げた浅草の居宅が十年以  
上前に類焼し、現在は「田舎暮らし」をしている。ここは類焼  
の危険はないこと。
- ・ 妙法寺村の近くの村の人に源介の妹が縁組したので、安證寺の  
ことを尋ねたところよく知っていた。安證寺と自分の家との古  
い縁を話したところ、安證寺の住職が出目家であることが分

かつてもらえたこと。

先祖の寺と縁を結びたいと思い、文通が出来るようになって喜んでいること。機会があれば手紙をいただきたいこと。また返書はこの手紙を届けた人宛に出して頂ければ届くこと。

現在の住所は「江戸深川小名木川通り上大嶋村」であること。

福井御坊の用事などで江戸に出てこられるときにはぜひ尋ねていただきたいこと。

近年京都では能が流行しており、面細工を多く頼まれていること。

六条御殿（西本願寺？）・鷹司家からの面の用命もあること。

現在息子が二人あるが、幼年なので、京都に行きたい望みもあるが行けないこと。

昨年築地御坊で蓮如の法事の節に能があつたが、「珍しい」ことである。

「常観」までの寺の代々の記録を書いたので、「現在の住職」の部分を書いて頂きたいこと。

常応の筆（書）を色々所持している。自分が持つている印として常応の反故を一枚呈上すること。

追加したい事柄もあるが、昨夜「縁家」へ行き、越前行きの便があると聞いて、今朝早く書いたので非常に整わないが察していただきたいこと。

非常に久しぶりの文通なので、おそらく常観はなくなっているのではなからうか。現在の住職と旧縁を回復したいので文通をお願いしたい。

自分が老年になったら、京都から福井の安證寺まで出かけたい（移住したい？）と望んでいる。

という内容となる。

満光が剃髪していること、類焼によって転宅したことやその住所、

男の子が二人いる事、京都の本願寺関係の注文を受けていること、京都で能が流行していると書かれていることなど、興味深い内容である。この書簡からは、満光が手元に常応筆のものがあつたことを述べ、常観までの代々の記録を安證寺に書き送っていたと考えられる。満光は常観以前の安證寺の記録がかなり散逸していることを知っていたと考えてよいだろう。断絶はあるものの、満光の時代まで、安證寺と出目元休家は連絡をとっていたと考えられる。また、寺院の注文による面の流通・寺院の手紙への「便乗」など、時代により濃淡はあつたであろうが、本願寺のネットワークが出目元休家にとつてかなり重要であつた可能性はあるだろう。今後、満光の生年がわかり、この書簡の年代が明らかになることを願っている。

## 五 「面目録」

面の名前を列記した一枚書きが、前記の満光書簡とともに保存されている。ここではこれを仮に「面目録」と呼ぶ。この末尾には「先々住の御筆也」と端書がある。満光が現在の住職を常観としているのならば、先代が常倫、先々住が常応である。この書は満光の書簡にある「常応筆の反故」である可能性が強いだろう。

「面目録」（写真四）を翻刻すると、

- 一 □せんせう
- 一 あこせう
- 一 かみなしせう 髪無尉
- 一 大し、 大獅子
- 一 小し、 小獅子
- 一 とかう 外江
- 一 やかん 野肝

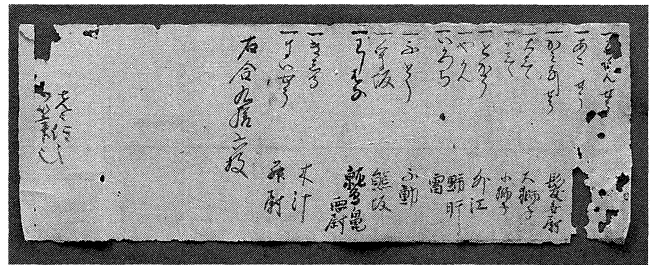
雷 雷  
不動 熊坂 驚鼻 惡尉  
一 ふとう  
一 くま坂  
一 わしはな  
一 きしる  
一 まいせう  
右合九拾六枚  
舞尉

先々住之  
御筆也

となる。この、おそらく元は九六枚にも上る能面目録が常応の手跡であるとするれば、何のために書かれたのか、なぜ江戸の元休家に齎されたのか興味があるが、ここでは紹介に止めておく。

## 六 満忠（満志）の過去帳記載

江戸の出目元休家の菩提寺である東京都港区高輪の正源寺に保存されている過去帳と墓碑を以前調査した。<sup>(注1)</sup> ここにある出目満忠（満志）の墓碑には、その没年月日が「元休居士 天保四（一八三三）癸巳年八月十日」とあるが、安證寺過去帳には「天保四巳年」の欄に「釈元休 八月十九日 江戸出目次郎左衛門」とある。命日が九日遅い。満忠の没年が安證寺過去帳にも記載されたのは、満光によって安證寺に通知されたためと考えられる。その際に間違いが生



写真四

じたのだろう。正源寺の過去帳には満忠の命日が八月九日と記されているので、伝える際にあやまって「十」の字が入ってしまったのかもしれない。なお、安證寺過去帳には横に「昭和十年六月三十日付通知 釈元休ノ命日八月十九日は八月十日の間違ノ事 東京ヨリ訂正方申来リシニ訂正スル事」と書き込みがある。没年月日の訂正がなされているのは、昭和の出目元休（矢野正吉）によって通知されたものと考えられる。矢野正吉については「昭和十年六月四日本人来寺」と裏に記された名刺が安證寺に残っているので、安證寺と交流があったことは間違いない。

## 七 まとめ

以上、安證寺所蔵文書を中心に、本願寺教団と出目元休家との関係について伺えることについて紹介してきた。出目元休家と本願寺は、越前在住の時代から満光の時代まで、形を変えつつも連綿とかなり密接な関係が続いていたと考えられる。本願寺は越前在住時からの出目元休家の後援者であり、大名家とお抱え能楽師の關係に類似した關係が存在したかも知れない。今後、面打家と寺院との関わりについて、さらに資料を求め、調べて行きたいと願っている。

### 注

（注1）喜多古能「能楽假面譜（つゞき）」「能楽」第六号 わんや江島書店 明治三十五年十二月発行 三五頁

（注2）『假面譜と奈良人形』国立国会図書館所蔵 整理番号・八四一―一四六

（注3）『武生市史 資料編 神社・仏寺所蔵文書』武生市史編纂委員会編 武生市役所 昭和四〇年三月発行 一三三頁

(注4) 『武生市史資料編 検地帳 村明細帳等』 武生市史編さん委員会編集  
武生市役所 平成八年二月発行 九頁

(注5) 『市制35周年記念 特別展 能面の美——越前出目家初代満照の作品——』 図録 監修・指導・執筆 中村保雄・杉浦茂 武生市・武生市教育委員会編 越前の里郷土資料館 昭和五十八年十月発行 「(13) 出目源介 起請文」として写真掲載。翻刻は『下間少進集Ⅲ』 片桐登校訂 能案資料集成6 法政大学能案研究所編 わんや書店 昭和五十一年八月発行 一六五—一六六頁にある。片桐氏の翻刻に導かれつつ、写真をもとに翻刻した。(原文の行に揃えたのみで、読みは片桐氏と同じ。)

(注6) 『下間少進集Ⅲ』 同注5 二〇四頁

(注7) 同注1 三六頁

(注8) 同注4 二二頁

(注9) 拙稿「出目元休家墓参記」 「東海能案研究会年報」第十三号 東海能案研究会 平成二十一年三月発行 三頁 なお、この「出目元休家墓参記」中で、正源寺住所について「新宿区」とするのは「港区」の誤りである。

#### 補記

貴重な資料の閲覧・撮影を許可頂きました越前市安證寺様、また貴重なご教示をいただきました保田紹雲先生、越前市図書館の野澤雅人氏に心より感謝致します。

いづか・えりと／文化情報学部教授  
E-mail: erito@sugiyama-u.ac.jp